

2012年度 代表事業③

事業名

9月度第二例会

～ 共助「静岡モデル」の創造～

委員会

危機管理委員会

委員長： 内藤 雅敏

副委員長： 和田 晃太郎

副委員長： 山田 英貴

幹事： 早川 貴雅



事業趣旨要約

5月に開催した「危機管理シンポジウム」において、静岡青年会議所会員の地震や地域防災計画への理解、家庭や事業所における予防対策を学び、「自助」における知識や意識の底上げをしました。また、関係諸団体の皆様に、地域防災における組織間の連携の重要性を訴え、我々の志やこれまでの青年会議所の活動を披露することにより、愛する静岡（まち）を守るための協働の第一歩を踏み出すことができました。次なるステップとして、災害ボランティアなど「共助」の分野で日頃から活動をされている関係諸団体間の関係を更に緊密なものとし、相互連携の機運を醸成するとともに、共助における静岡のモデルを具体化する必要があります。

本例会では、災害多発地域である新潟県や東日本大震災被災地域への入念な取材をもとに、JCを含む関係諸団体間のネットワークの必要性と被災時に実際に成果を上げた実例を紹介いたします。また、今以上に静岡の共助の取り組みを強固なものとするべく、関係諸団体の皆様とのディスカッションを行い、本例会が更なる信頼関係構築の醸成の場となることを願います。

これまでの災害に改めてその重要性が問われた関係諸団体との連携について、共に考え更なる発展のために邁進することが、明るい豊かな社会の実現への大いなる足がかりになることを確信します。

背景

危機管理シンポジウム

- ・静岡市は地震災害の差し迫った危険にさらされている。
- ・静岡青年会議所には災害時に地域のために率先して行動を起こす使命がある。
- ・LOMメンバーの地震災害に関する知識や意識、このまちの危機管理体制への理解は充分とは言えない。
- ・静岡青年会議所の危機管理に対する運動は、外部団体との連携無しには達成し得ない。

本例会

- ・危機管理シンポジウムで、静岡青年会議所は地域防災への参画が求められていることが分かった。
- ・災害ボランティアなど共助分野で活躍する関係団体相互の連携は、発災時における復旧復興の大きな力となる。
- ・東海地震の危機が切迫する静岡においては、新潟県や東日本被災地各地のように、社会福祉協議会を中心とする共助ネットワークの構築を推進すべきである。
- ・災害未経験の静岡青年会議所は、共助ネットワーク参画の意義や発災時に主体的に行動する術を身に付ける必要がある。

効果

- ・まちづくり団体である静岡JCと、災害ボランティア分野で活躍する関係団体の協働の重要性を説き、対話の機会を設けることで、静岡の防災減災対策の発展に寄与することができる。
- ・東北や新潟などの災害を経験した地域のJC関係者、関係団体への取材を報告することにより、具体的な相互連携の内容や手法を理解することができる。
- ・静岡における連携体制の具体像やメリット、課題を知ることができる。
- ・参加団体それぞれの担い役割が全体で共有される。
- ・理想の共助「静岡モデル」を発表することで、具体的なネットワークの中身を全参加者が理解できる。
- ・相互連携を事前に構築することが、発災時の活動にどう有効に働くかを焦点に説明を行う。
- ・青年会議所の広域救援ネットワークを紹介することで、青年会議所が参画するメリットを見出すことができる。

例会の流れ・目的

第一部 ～自助・共助・公助の理解～

- ・「自助、共助、公助」の概念の説明。
- ・例会のゴール「静岡モデル」の創造（関係団体の協働組織の創造を指し、その体制の強化こそが、発災時に被災者が一日も早く元の生活に戻るための重要な要素となること）を説明。

第二部 ～東日本、新潟 共助連携モデル紹介～

- ・災害経験者である新潟・東日本のJC関係者、行政、社会福祉協議会、NPO等への取材をもとに、関係諸団体同士の連携のメリット、JCが参画するメリット、今後の課題や方針など、コーディネーター説明に取材映像を織りまぜて説明。相互連携を事前に構築することが、発災時の活動にどう有効に働くかを焦点に説明を行う。

第三部 ～共助「静岡モデル」の創造に向けて～

- ・シミュレーション（JCの動きを軸に）
- ・発災から共助体制に参画するまで（ボランティアセンター運営開始まで）の個の動きを時系列で説明
- ・ボランティアセンターにおける関係団体とJCの具体的な協力体制について説明
- ・日本青年会議所、地区・ブロック協議会の広域救援ネットワークを地域のボランティアセンターでどのようにマッチングしどう活かすかを説明

ディスカッション
行政、市社会福祉協議会、赤十字社、民生委員、ボランティアコーディネーター、JC（理事長）で、静岡の共助体制の発展のためのディスカッションを行う。（各々の団体の役割、得意不得意分野、共助体制のあり方について）

まとめ

- ・青年会議所が担わなければならないことを総評で伝え、本例会の意義を再確認する。
- ・総評では、本例会のテーマである共助だけでなく、大前提となる自助にも触れる。

事業目的の達成検証

事業目的に達した点：

- ・新潟県、東日本被災地各地の共助の取り組みを紹介し、現在の静岡において、関係団体の協働がとても重要であることをご理解いただくことができました。
- ・静岡青年会議所が取り組む内容も明確にすることで、地域防災における静岡青年会議所の立ち位置が明確に認識された。
- ・「静岡青年会議所が発災時を行うか」、そして「静岡モデル」とは何か、何を旨とするかを説明し、我々が行うべき役割についてご理解いただけた。

達成検証

事業目的に達した点：

- ・会員・家族との交流を深める事により、思いやりのこころと結束力を強める事が出来た。
- ・家族に対して日々の活動を理解していただけた。
- ・各委員会の会員・家族の出席率が異なり、しっかり交流が図ることができなかった委員会があった。

所見

我々静岡青年会議所は、各地からの善意のボランティアの受け皿機能（受援力）を強化すべく、社会福祉協議会を中心とするボランティア本部、ボランティアセンターの運営サポートをすることが最良の道という答えに行きつきました。

まずは5月の危機管理シンポジウムで、我々が直面する危機（東海地震）や地域の防災体制を学び、その上で我々がどんな地域貢献ができるか、その可能性について考えました。その結果、9月度例会において、先に述べた我々の担いについて全メンバーの前で公表するに至りました。

5月と9月の事業に加え、社会福祉協議会、ボランティアコーディネーターの皆様方との意見交換会の立ち上げを行い、東日本や新潟の被災経験LOMの皆さんが口を揃えて必要性を説く「顔の見える関係」の礎を築くことができました。対内的には、静岡青年会議所の危機管理マニュアルを現実的に機能するマニュアルに改訂し、同時に静岡青年会議所として災害時の活動の根幹となる災害安否確認システムを導入することができました。また有事の際、静岡青年会議所が被災の当事者となって機能不全に陥る可能性を回避すべく、災害時相互支援協定を社団法人新潟青年会議所と締結することができました。

目的

- ・災害ボランティアに関与する関係諸団体（静岡青年会議所含む）が相互連携の必要性と有益性を認識し、静岡の共助ネットワークの発展を促進する。

- ・静岡青年会議所が発災時に具体的にどのように行動し、どんな役割を果たせるかを理解していただく。

- ・災害ボランティアに関与する関係諸団体（静岡青年会議所含む）が相互連携の必要性と有益性を認識し、静岡の

事業概要

日時場所：2012年9月25日（火） 19:00～21:00 グランシップ6F交流ホール

（別途 5月15日事業危機管理シンポジウム～踏み出そう！愛する静岡のまちを守るため～ 及び 災害時相互支援協定の締結、災害危機管理マニュアル改訂、災害安否確認システム導入 が行われた。）

参加人数：・関係諸団体18名 静岡JC会員（結果、157名）

事業総額：458,455円（5月度例会238,567円、他300円、21,320円、84,630円）



担当委員長Q&A

- 01** 行政に関わる点において、まちづくりへのかかり方などで、JCだからこそできるものがあると思います。その中で、防災ネットワークや静岡モデルの構築を選ぶこととなった大きな要因など教えてください。
- 東海地震の対策において、行政を中心とした「公助」は先進的な準備が成されている中で、ボランティアや民間団体がこれまで以上に互いを知り顔の見える関係を構築すれば、「公助」の手が届かない分野を更に補完することが出来ると考え、当該テーマを設定しました。
- 02** 防災に関して行政や各自治体、民間団体なども取り組んでおります。JCだからこそできる防災に関わる意義など内藤さん自身のお気持ちを聞かせてください。
- 東日本大震災において、日本、地区、ブロック、各地LOMに加えて、職別の部会などの協力を経て、様々な職種や専門職の集合体であるJCが物資補給の分野で大きな活躍をしました。
- また、一定の組織化が成されてこそ奏功するボランティアの受入れにおいては、組織の構築から運営を日常的に行っているJCの組織運営の技術やリーダーシップが、混乱状態の中でJCに求められるものだと思います。
- 03** この事業を通し特にメンバーをまとめる上での苦労した点や工夫した点などございましたら教えてください。
- 災害対策は専門的知識を習得しなければ事業が組み立てられないため、年初は委員会で静岡市の防災対策課を招いての研修をしたり、メンバーに書籍を勉強してもらったりしました。
- また、多くのノウハウを積み上げている他団体に対し、後発であるJCが中途半端な調査や思い込みが先行した提案をしては失礼にあたるので、今の静岡の課題の抽出のためにたくさんの取材を行いました。

取材全体としてのまとめ・感想

静岡JCとしてまちづくりに参加する意義や誇りを醸成するため、我がまち静岡を自らの手で守る防災への活動を行い、魅力あふれる未来の実現に取り組みました。具体的に静岡JCとしてできる防災とは、JCの組織運営の技術やリーダーシップをボランティア受け入れ時に役立てるために、事前に民間団体やボランティア団体と顔の見える関係を構築することだと提案しました。

- 04** 多くの団体と調整を図る中で、自分自身やLOMとして得たものを教えてください。
- 時間が経てば忘れ去られがちな災害対策は、大地震の発生が確実視される静岡市に根差すJCが如何に継続的に関わっていくべきか、改めて考え直すきっかけとなりました。LOMとしては、過去の他地域のJCの活躍を紹介したことで、現実我々が地域に貢献する力を有する組織であり、その一員であることを認識できたと思います。
- 05** この事業を行いLOM全体の意識はどのように変わっていききましたか？
- 委員会メンバー丸となって防災に取り組んだので、このまちに対する自分たちの責任を今も忘れずに持っていると思います。当時のLOMにおいては多くのメンバーを巻き込み、JCがすべきことを共有しました。
- 06** 共助ネットワークの構築や危機管理マニュアルの改訂を行いました、次年度への引き継ぎの仕方

苦労した点や工夫した点などございますか。

専門分野であるため、1年間で蓄積した知識をそのまま引き継ぐのが困難でした。残された書類やデータだけでは読み取れない部分が多々あり、後継のスタッフと勉強会を行い次年度へと引き継ぎました。メンバーの入れ替わりが激しい静岡JCにおいて、当時を知らないメンバーやこれから入会するメンバーに対しても、防災に対する気概、このまちに対する気概を持ち続けるための継続的な取り組みが必要だと考えます。



取材前後の特に気付いた点

防災ということで専門的な話が先行して教科書やマニュアルを作ることが中心の運動と思っていましたが、実際は委員会メンバーが実際に防災関係の方々にお会いして防災・町づくりの重要性を体験し、それをLOMメンバーへも共有するように工夫されていました。